

雪彦山の鳥類

小林 平 一

雪彦山は飾磨郡の最北端にあつて殆んど全山、岩山で幾多の大岩壁があり且つ樹相に豊み、観光地として近年有名になつてきた。この地は古くから多くの植物学者によつて植物相が調査されているが鳥類に関しての調査は成されていない。

筆者は昭和23年6月より26年迄の間、この山へ昆虫や植物や鳥類の調査の為に度々登山したので、一応記録をまとめてみる事にした。

本山は筆者の宅から25km位あり、バスの便がなく常に自転車で行かねばならず、その上道が坂道ばかりなので思うにまかせず特に厳冬期には苦痛であつた。過去4年間に登山した回数、60回、のべ日数約90日である。

この山は標高が神戸の大甲山と殆んど等しいが、登山口から頂上迄が他の山に比べて短く且つ巨木林が多いので山の気分を味わうには便利である。溪流が奥迄入り込んでいて又植物の種類が多いので鳥類の種類と個体数は他山に比類をみなない。

雪彦山こそ植物、昆虫、鳥の宝庫である。この山の植物では、ヒカゲツツジ、アカヤシオ、ベニドウダンの満開の素晴しさ、昆虫ではアオバセ、リ、アサギマダラ、スミナガシ、モンキアゲハの多い事、鳥類ではキツキ科の鳥類の多い事が目立つている。日本の分布上からみて少いオオアカゲラが特に多く、コケむすモミの巨木をコツコツたゞいていたり、春にはコマドリ、ウグイスがやたらに囀る。筆者は中国、九州の山々でもこの程オオアカゲラをみたことはなかつた。

県内各地には相当多くの「鳥の天国」と云う鳥類保護地域があつて、大抵の場合そこを訪れても鳥の少ないのに驚く。それは個体数の多いと云う事と記録された種類の多いと云う事とは必ずしも正比例はしないからである。

現在迄に県下及びその附近で確実に記録のある鳥類は、海上、海岸、及び1、2度しか記録のない迷鳥も含めて、242種、亜種を含むほどがある。

その中で山に関係のない鳥が94種ほどある。山のみで見られる鳥は148種ある。よほど条件が良くても1つの山で見ると出来る可能性の有る鳥類は、120種前後である。後の20種前後は非常に稀種か迷鳥か或いは特定の地域のみで見られる鳥類である。この様な好条件の山と云うと沢山はない。条件は高い山で多くの植物を産し且つ巨木林を有し、溪流があることである。

雪彦山はこの条件を備えていて且つ山の面積が比較的小さく独立しているのも特に個体数が多く簡単に多くの鳥をみる事が出来る。

氷ノ山でも宍粟郡奥谷附近でも、あまり広範囲すぎて、たとえ鳥の種類と個体数が多くとも小範囲内で多くまとめて見る事が出来ないのも観察に幾倍もの労苦がある。この様な意味から雪彦山は鳥が集合して鳥の天国と云う名に恥じない。

さて、鳥類が如何に人生と密接な関係があるかと云うに、今、突然地球上から7年間鳥が居なくなると害虫ははびこり、樹木は枯死し、人間は生存し得なくなると云われる。戦時中に日本に鳥がひどくへつた為に松喰虫が全国にひろがり、その為に枯死した松の木は、2,849,517本、10坪の家なら60万戸分（昭和22年度末迄）である。

これは単に松に関係した事であるが他に水田、畑、森林、果樹園の被害は又莫大なものである。

スズメにしてもその食性を1年間通じてみると害は4割、益は6割と云う数字を示している。そして全鳥類の内、人生に無関係な鳥はあつても全く有害な鳥はない。

そこで近年、林野庁では法律を改めて狩猟鳥を46類から12類にへらしてカスミ網は禁止し、猟期を半分へらし、年に1度、ベードウィークを定めて鳥類を一般に認識させ、キジを国鳥にして全鳥類の保護に努力をしているのである。此等を考える時、如何に鳥類の習性を調べたり保護すべき事が必要であるかが知り得よう。

普通、鳥の観察と云うと遊び半分に考えたり馬鹿者あつかいにされやすいが、それどころかもつと一般に知識を持つて習性を調べたり、保護しなければならぬのである。この点では、我が国は文明諸外国に比べて一番おけているのである。

さて鳥類を分類するのに形態によつて分類し又、渡りによつて分類する事もある。渡りの分類には

留鳥—生れた土地のせまい範囲しか移動しない鳥で1年中見られる鳥。

漂鳥—本州の中だけを季節のかわりめに移り動く鳥。

夏鳥—春に南方から渡つて来て繁殖し秋に南へ去つて行く鳥。

旅鳥—春と秋に日本を通過するもの。

冬鳥一秋、北から日本へ来て冬を越し翌年春に北へ帰る鳥。

此処では科毎に分類して学名もつけ又渡りによる分類をしておいた。筆者が雪彦山で調査した内、食性やその他についてはあまりふれず単に一般的な習性のみ記す事にした。調査区域は山之内小学校の登り坂から雪彦山全体と云う事にした。

PASSERES 燕雀目

CORVIDAE 鴉科

(1) *Corvus leuillantii japonensis* Bonap. ハシブトガラス (留鳥) (蕃殖) (少し)

(2) *Corvus corone orientalis* Evers. ハシボソガラス (留鳥) (蕃殖) (多し)

一般に我々が黒いカラスと呼ぶものに上記の2種類がある。和名の通りハシブトガラスはハシボソガラスより嘴が太い。野外で判別は困難である。

本州の北の方に行く程ハシブトの方が多くてハシボソは少い。県下ではハシブトの方が遙に少く、この山でも甚だ少いが両種共、留鳥で蕃殖している。しかし食物の関係で常に生息しているのは山麓地の人家近くの畑又は樹林のみである。

(3) *Garrulus glandarius japonicus* T. & S. カケス (カシドリ) (留鳥) (蕃殖) (多し)

本種はこの山に最も個体数の多い鳥の一つで四季、山麓から山頂迄見られ蕃殖しているが蕃殖期に他鳥の卵やヒナを食害するので個体数の多い事は餘り有益な事でない。しかし羽毛が美しいので樹相と共になくてはならない鳥である。我々の如き愛鳥家でもこの種のギャーツと云う声を楽しむ事はいさゝか悪趣味の様に思えるが、さりとして登山者に又聞きなれた山の気分を味あわせの上他鳥の声を上手にまねるので愛すべき鳥である。

STURNIDAE 椋鳥科

(4) *Spodiopsar cineracea* (T.)

ムクドリ (漂鳥) (少し)

この種は主として年中山麓の田畑や附近の樹林に見られ昆虫を主食として群集しているが、秋に果実を好むので柿を多く作つているこの地では、餘り好ましい鳥ではないが加害程度より蟬虫を嗜食するので有益な鳥である。この地には個体数は少い。

(5) *Sturnia philippensis* (Forst.)

コムクドリ (旅鳥) (少なからず)

本種の渡り時期はこの地では4月下旬から5月中旬、及び8月下旬から10月上旬の二期であつて、この季節中に麓では50羽位の群が見られる。この種は前種の如く喧噪な鳴声を発する事はなく又前種の如く地上に降

りる事はない。

FRINGILLIDAE 雀科

(6) *Passer montanus saturatus* Stejn.

スヤマメ (留鳥) (蕃殖) (普通)

(7) *Passer rutilans rutilans* (T.)

ニウナイズマメ (冬鳥) (少し)

スヤマメより赤褐色の濃い美しい冬鳥で、当地でみられるのは主に渡来期と渡去期の11月及び4月に群を成して出現する。

(8) *Coccothraustes coccothraustes japonicus* T. & S. シメ (冬鳥) (少なからず)

秋の渡りの際は10羽位群を成しているが、冬期は大抵単独で生活している。

(9) *Eophona personata personata* (T. & S.)

イカル (漂鳥) (多し)

飼鳥家が俗にマメマワシと呼び、キーコーキー、と美声で囀る。本邦特有の種類でこの山では渡りの8、9月に大群を成しているのをよく見受ける。群の中には一部非常に白つばい幼鳥も混じている。この山で非常に数の多い鳥の一つである。

(10) *Chloris sinica minor* (T. & S.)

コカワラヒワ (留鳥) (蕃殖) (普通)

(11) *C.s. Kawarahiba* (T.)

オオカワラヒワ (冬鳥) (少し)

前種コカワラヒワとは同種異亜種である。非常によくて野外で一見して判別出来ないがよく注意すると後者は稍黄色が淡く、大きさが少し大きいので区別出来る。共に冬期は大群をなしているがオオカワラヒワの方がこの地方では遙かに少い。前者は留鳥でこの山で蕃殖しているが後者は冬鳥で夏は居ない。(本種の蕃殖地はカムチャツカ、千島である。)

(12) *Carduelis spinus* (L.)

マヒワ (冬鳥) (少し)

前種より小さくて黄色い美しい鳥である。この山の観察では数は少い様である。前種のように大群は成さぬが少群でよく針葉樹林で見かける。

(13) *Carduelis flammea flammea* (L.)

ベニヒワ (冬鳥) (少し)

習性はマヒワと同様であるがその数は少して群を成さない。この山で極く稀に観察が出来る。

(14) *Uragus sibiricus sanguinolentus* (T. & S.)

ベニマシコ (冬鳥) (少なからず)

雄雌共バラ色の美しい鳥で、美声でなく、個体数はあまり多くないが冬期特に春先にこの山の低い所迄よく見かける。

(15) *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* Lafes.

ウン (冬鳥) (多し)

フイッフイッと鳴いて腹の赤い美しい鳥であるが冬は高い所の樹の芽を喰い荒し、春先には麓迄現れて桜のつぼみをかたつばしからボリボリ群を成して喰っている。春先に柏尾氏の桜並木が気の毒な程毎日食害されている。

(16) *Loxia curvirostra japonica* Ridg.

イスカ (冬鳥) (稀)

上下の嘴が先端で曲つて交叉している唯一の鳥類で雄は全体に赤く雌は黄褐色をしている。常に針葉樹林に棲み主に松の実を喰っている。当山では冬期稀に見られる。

(17) *Fringilla montifringilla* L.

アトリ (冬鳥) (多し)

冬期この山中の樹林内に単独でいる事もあるが主に大群でいる事が多く筆者は一度数千羽が木から木へ吹雪の様に移つてゆく一大壮観に出合った事があつた。山麓の田畑にも100羽前後の群を目撃した事がある。

(18) *Emberiza spodocephala personata* T.

アオジ (冬鳥) (多し)

背は暗緑色、腹は黄色の美しい鳥で冬期最も普通の特有種で本州中部以北では多く繁殖しているが此処では冬鳥である。

(19) *Emberiza elegans elegans* T.

ミヤマホオヅロ (冬鳥) (少し)

羽毛美しく啼鳴がよいのでよく飼育せられる鳥である。この山ではあまり多くはない。

(20) *Emberiza sulphurata* T. & S.

ノジコ (冬鳥) (稀)

アオジに似ているが稍小形でアオジ程青くなく且つ個体数は遙かに少い。よく飼われる鳥である。特に出雲地方ではイズモノノジコと迄云われて有名である。

(21) *Emberiza cioides ciopsis* Bonap.

ホオジロ (留鳥) (普通)

麓から山頂迄普通で、繁殖している。

(22) *Emberiza fucata fucata* Pallas

ホオアカ (冬鳥) (少し)

この地方では冬期のみ現れ個体数はホオジロより少い。本州中北部に繁殖する鳥であるが鳥取県大山 (1700m) では繁殖している。

(23) *Emberiza rustica latifascia* Port.

カシラダカ (冬鳥) (多し)

冬期に麓の田畑で大群をなしている。4月下旬になれば美しい夏羽もみられる。

(24) *Emberiza variabilis* T.

クロジ (冬鳥) (少し)

冬期単独で樹林中に見られるが個体数は少い鳥である。

ALAUDIDAE 雲雀科

(25) *Alauda arvensis* L.

ヒバリ (留鳥) (繁殖) (普通)

MOTACILLID AE セキレイ科

(26) *Anthus hodgsoni hodgsoni* Rich.

ビンズイ (冬鳥) (普通)

10月から4月迄林間によく小群を成して見かける。

(27) *Anthus spinoletta japonicus* T. & S.

タヒバリ (冬鳥) (普通)

前種によく似ているが山麓の田畑に小群をなしている。野外で色彩による判別は困難であるが区別点は①ビンズイは林間において地下に下りていても飛び立てばすぐ木の枝に止り枝上を巧みに歩むがタヒバリは田畑の地上において木の枝に止る事がなく又林中では見受けにくい。

②ビンズイは飛び立つ時、ピーイン、ピーインと鳴くがタヒバリはこの時チーイツ、チーイツと鳴く。

③タヒバリはビンズイより少し大型で胸の斑紋はビンズイより不鮮明である。(これは野外で一見しては区別困難。)

(28) *Motacilla alba lugens* Glog.

ハクセキレイ (冬鳥) (稀)

山麓の田畑に10月下旬から4月迄見る事があるがこの山では稀である。セグロセキレイと区別点は顔が全体に白く、黒色の過眼線のある事である。

(29) *Motacilla grandis* Sharpe

セグロセキレイ (留鳥) (少なからず)

山麓の田畑、川面上に少なからず且つ周年居て人家の屋根、石垣等の間に繁殖している。

(30) *Motacilla cinerea caspica* (S.G. Gmelin)

キセキレイ (留鳥) (繁殖) (極めて多し)

山麓の川面から頂上迄何処でもみられる。夏羽になると喉部が黒くなり一層美しい。最も多い鳥で且つ繁殖している。

ZOSTEROPIDAE メジロ科

(31) *Zosterops palpebrosa japonica* T. & S.

メジロ (留鳥) (繁殖) (多し)

群を成して極く普通な留鳥。

CERTHIIDAE 木雀科

(32) *Certhia familiaris japonica* Hart.

キバシリ (留鳥) (極めて稀)

極く小形の地味な色彩で稀な鳥である。キツツキの様に樹幹を旋回しつつ上昇する。筆者は標高 800m 近くの巨木林中で昭和26年5月上旬に一羽、同年8月16日

に1羽を観察記録した。

SITTIDAE 五十雀科

(33) *Sitta europaea hondoensis* But.

ゴジウガラ (漂鳥) (少なからず)

此の種は分布広く、欧亜の大部分とアフリカ北部迄分布し多数の亜種に分たれ、我が国には3亜種有り、本州には上記 *S.e.hondoensis* (ゴジウガラ) とそれ以上に胸部以下の下面が黄褐色を呈する *S.e.roseilia* (キウシウゴジウガラ) があり *S.e.roseilia* は伊豆半島以南の太平洋岸に分布する。

「阪神地方鳥類目録」によれば阪神に分布する亜種は *S.e.roseilia* キウシウゴジウガラとして発表されており勿論筆者も雪彦山に産する亜種もこの亜種に属するものと思つていた。然るに筆者が昭和25年来この山で採集した9点の標本について本州中部産の標本多数と比較したところ、*S.e.roseilia* に属する物は1点もなく全部が *S.e.hondoensis* (ゴジウガラ) であつた。この山に於ける筆者の観察は標高500m以上の樹林中で8月中旬より11月にわたる間で特に9、10月には稀ならざる種であるが、個体数は非常に少い。なお筆者はこの山に於ては蕃殖していないと考える。

又筆者の採集し得た個体は7♂、2♀で♀は♂に比して遙かに少なかつた。

PARIDAE 四十雀科

(34) *Parus major minor* T.& S.

シジウガラ (留鳥) (蕃殖) (多し)

最も普通な留鳥の一つで常に群を成している。

(35) *Parus varius varius* T.& S.

ヤマガラ (留鳥) (蕃殖) (多し)

前種と共に最も普通なカラ類で多く蕃殖している。

(36) *Parus atricapillus restrictus* Hell.

ヒガラ (漂鳥) (少し)

関西には非常に少い種類であるがここではさほど稀ではない。4月及び9月にカラ類の群中から4羽採集した。鳴声はヤマガラによく似ていて鳴声で判別する事は出来なかつた。しかし、ヒガラ、シジウガラ、ヤマガラの声は声のみ判定し得る。

(37) *Parus ater insularis* Hell.

ヒガラ (漂鳥) (少し)

鳴声のよい鳥であるがシジウガラより遙か少い。此の山では蕃殖しない様である。

(38) *Aegithalos caudatus trivirgatus* T.& S.

エナガ (留鳥) (蕃殖) (多し)

俗にマツカサドリと云われ何十羽も群をなしてジュル、ジュルと鳴く極めて小形の種類である。稀には胸に少しの斑紋の現れた個体もある。この種は一個の巢を4-5羽の雌雄で12個位も卵を産んで共同営巣する

事が少くない。

(39) *Regulus regulus japonensis* Blakiston

キクイタマキ (冬鳥) (多し)

極めて小形の美しい鳥で冬期カラ類の群と行動を共にしている。時として2m位も近づき事が出来る。

LANIIDAE モズ科

(40) *Lanius bucephalus bucephalus* T.& S.

モズ (留鳥) (蕃殖) (多からず)

(41) *Lanius cristatus superciliosus* Lath.

アカモズ (旅鳥) (稀)

モズより赤味の強い美しいモズであるが5月に通過する稀な旅鳥である。

此の地に於ける筆者の観察は昭和25年5月唯だ1回。

BOMBYCILLIDAE レンジャク科

(42) *Bombycilla japonica* (Sieb.)

ヒレンジャク (旅鳥) (年により不同)

此の種は年によつて渡来数の差が大で主として山麓の低い樹林で見える。此の地で筆者がみたのはいずれも4、5月で、多い時でも2、30羽の群であつた。

BRACHYPODIDAE ヒヨドリ科

(43) *Xos amaurotis amaurotis* (T.)

ヒヨドリ (留鳥) (蕃殖) (極めて多し)

此の山に於ける周年最多の鳥である。

CAMPEPHAGIDAE サンショウクイ科

(44) *Pericrocotus roseus divaricatus* (Roff.)

サンショウクイ (旅鳥) (多し)

ヒリヒリ、ヒリヒリと鳴き渡るのでこの名があるが、此の山では4、5月と8、9月に群を成して通過する。

MUSCICAPIDAE ヒタキ科

(45) *Terpsiphone atrocaudata atrocaudata*

(Eyton) サンコウチヨウ (旅鳥) (稀)

雄は30cmも長い尾羽を持つた実に美しい鳥である。4、5月と8、9月に通去する旅鳥(この山に於ては)でその数は極めて少い。鳴声が日月星と聞えるので三光鳥と呼ばれるが、その声は又素晴しく美声である。しかしこの山では通過するのみで又それもごく短い期間である故に富士山麓の如き鳴声(囀り)は聞かれない。

(46) *Alseonax latirostris latirostris* (Roff.)

コサメビタキ (夏鳥) (蕃殖) (多し)

ヒタキ科鳥類中最も数が多く且つ蕃殖しているが色彩が地味な為に目につき難い。

(47) *Hemichelidon sibirica sibirica* (Gmel.)

サメビタキ (旅鳥) (稀)

色彩がコサメビタキに非常によく似ているので野外で8倍の双眼鏡によつても判別は困難である。個体数は前種より遙か少い。前種との区別点は、

①体が少し大きい。②背面はコマセビタキより少し濃色。③上胸部及び脇の部分に不鮮明な雲状斑を有する。

(48) *Hemichelidon griseisticta* Swinhoe

エソビタキ (旅鳥) (少なからず)

前種サメビタキに酷似していて野外に於ける判別は困難である。関西に於ては稀な種類であるが此の山に於て筆者は毎秋9月20日前後多数を観察している。

前種サメビタキとは、少しく大形で胸の軸斑が一層明瞭な点に於て区別し得られる。

(49) *Siphia mugimaki* (T.)

ムギマキ (旅鳥) (極めて稀)

羽毛の美しい且つ全国的にも少い旅鳥である。此の山に於ける筆者の観察は唯だ1回、1950年(昭和25年)9月23日、中腹の樹林中に於て1合を近距離で観察したのみである。

(50) *Muscicapula narcissina narcissina* (T.)

キビタキ (旅鳥) (多し)

きわめて美しい且つ美声の鳥で、この山には5月及び9月、10月に多数出現する。特に秋期の渡りにはその数が非常に多い。

この種と前種は一見よくにているが、次の点で区別す。

①ムギマキは腰も黒いが、キビタキは腰が美しい黄色である。

②喉から胸にかけてムギマキは美しい赤褐色であるが、キビタキは橙黄色である。

④キビタキの雌は地味な色であるがムギマキ雌は喉上胸部が淡い赤褐色。

(51) *Muscicapula cyanomelana cyanomelana* (T.)

オオルリ (夏鳥) (蕃殖) (多し)

ルリ色輝く最美の種類で飼鳥家には、ウグイス、コマドリと共に日本三名鳥の一つである。この山には春から晩秋迄個体数は最も多く、至る所でその玉を転がす様な美声が聞かれる。又蕃殖していて巢を多数発見出来る。

SYLVIIDAE ウグイス科

(52) *Phylloscopus borealis xanthodryas*

Swinhoe メボソ (旅鳥) (少なからず)

地味な色彩の小鳥で目にふれ難いが春秋両季の渡りの途中少なくともない。

(53) *Phylloscopus occipitalis coronatus* (T. & S.)

センダイムシクイ (旅鳥) (少なからず)

前種と羽色がよくにている野外で区別し難いが鳴声は特長のあるチチブ、チチブ、ジューウイと、とても大声を出し、且つ手に取つてみれば頭に黄白色の頭尖

線がある。渡りの際この山では少くない。

(54) *Horeites cantans cantans* (L. & S.)

ウグイス (留鳥) (蕃殖) (普通)

周年普通である。

(55) *Urosphena squameiceps squameiceps*

Swinh. ヤブサメ (夏鳥) (蕃殖) (多し)

非常に小型で尾羽が短くシイシイシイシイと虫の様な声で鳴く。この山では至る処多く且蕃殖している。

(56) *Acrocephalus arundinaceus orientalis*

(T. & S.) オオヨシキリ (旅鳥) (少し)

ウグイスより少し大型で、ギョギョシ、ギョギョシ、ギョシ、ギョシと騒しい声で鳴く鳥で、渡りの時季には中腹の谷川附近でもみられる。

(57) *Arocephalus bistrigiceps* Swinhoe.

コヨシキリ (旅鳥) (稀?)

前種より遙か小さいが色彩も声もよく似ている。渡りの際見られるが此処では前種より遙か少い。

(58) *Cisticola juncides hruniciceps* (T. & S.)

セツカ (夏鳥) (少し)

非常に小型の鳥で高くすんだ声でヒツヒツヒツヒツと鳴く。平原の草原に多い鳥で此の山の麓の田畑にみられるが少い。

TURDIDAE ツグミ科

(59) *Turdus cardis cardis* T.

クロツグミ (旅鳥) (多し)

黒と白の日本的な美しさを持つたツグミであるが渡りの途中ではその美声は聞かれぬが10月には多数見られる。此の際採集した4個の食性は全部樹実であつた。

(60) *Turdus pallidus* Gmel.

シロハラ (冬鳥) (普通)

冬期此の山の至る所の樹間に少くない。人が近よれば強い声で、クラツ、クラツ、クチツ、クチツと鳴き仲々姿は見難い鳥である。

(61) *Turdus obscurus obscurus* Gmel.

マミチャジナイ (旅鳥) (稀)

アカハラとよく似た鳥で顔に明瞭な白色の眉斑がある。渡りの途次関東に於ては多数渡来するが当地に於て筆者の観察では個体数が少い。

(62) *Turdus chrysolauus chrysolauus* (T.)

アカハラ (旅鳥) (少し)

4月下旬、5月に相当数渡来し美声で囀るのが見られる。当地に於ては旅鳥である。

(63) *Turdus naumanni eunomus* (T.)

ツグミ (冬鳥) (普通)

冬鳥で最も普通の旅鳥である。

(64) *Saxicola torquatus stejnegeri* (Parrot)

ノビタキ (旅鳥) (少し)

ツグミ科中の小型の種で夏冬両季の羽色が著しく違う。此の地では5月及び9月に通過する渡鳥である。山麓の草地、田畑の畦の灌木頂上によく止つているのを目撃する。

(65) *Tarsiger cyanurus cyanurus* (Pall.)

ルリビタキ (冬鳥) (普通)

雄の背面は美しいルリ色をした小形の種類で冬期樹間に普通に見られる。

(66) *Phoenicurus aureus aureus* (Pall.)

ジョウビタキ (冬鳥) (普通)

雀大の赤い美しい翼に大きい白斑のある鳥で俗に、モンツキと呼ばれる。晩秋の候、この鳥の渡来を初めてみる毎に冬の淋しを感じる。個体数は多くないがよく人目にふれる鳥である。

(67) *Luscinia calliope calliope* (Pall.)

ノゴマ (旅鳥) (稀)

姿がコマドリによく似ていて喉が真赤で美しい鳥である。鳴声もいので飼鳥家が1名ヒノマルコマドリと称している鳥である。此の種は北海道以北に繁殖するが数は全国的にみても少ない鳥である。此の山で筆者が観察したのは秋の渡り去る途中、10月中、下旬のみである。山麓の草地や稲の中で稀に見られる。早は特に少い。

(68) *Luscinia akahige akahige* (T.)

コマドリ (旅鳥) (少なからず)

ヒンカラカラと高らかに鳴き、あまりにも有名な鳥である。飼鳥家で知らぬ者はない。それ程日本の代表的な鳥である。此の鳥は本州中部の深山で繁殖してその数も少いこの山では早いものは3月下旬から見られ、特に中腹、神社裏の林中で多数の美声を聞かれる。筆者は未だ此の様に1ヶ所で多数見聞きした例は他にない。渡りの途中であるからである。秋の渡りは此の山では筆者は未だ見ないので何月何日頃か不明である。

(69) *Larvivora cyane* (Pallas)

コルク (旅鳥) (稀)

オオコルクと色彩がよく似ているが遙か小型で且つ前者は高い木に止るがこの種は深いアッシュの中ばかりの低い繁にいる。この山では渡りの際、通過するだけであるが稀ではない。筆者の観察は秋の渡りのみであるが8月下旬から9月上旬中に観察した。

PRUNELLIDÆ 岩鷓科

(70) *Prunella rubida rubida* (T. & S.)

カヤクグリ (冬鳥) (少し)

日本の高山鳥である。褐色の引き立たない色彩であるが鳴声は美声である。本種は冬期のみ此の山へも飛

来して来る。稀な鳥であるが筆者は4月上旬にも身近で囀るのを充分観察した事がある。

TROGLODYTIDÆ ミソサザイ科

(71) *Troglodytes troglodytes fumigatus* T.

ミソサザイ (冬鳥) (普通)

褐色の非常に小さい且つすばやい鳥で1名ネズググリ(ネズミの様にコソコソと早く飛び廻るので)とも呼ばれる。冬期はウグイスの様にチャツチャツと鳴くが4月に入ると、とても美声で、ピクククククと囀る。県下では尖栗郡奥谷で繁殖しているがこの山では繁殖せぬ様である。もつばら冬期、多く人家のゆか下迄くぐり廻つているのを見受ける。

(72) *Cinclus pallasii hondoensis* Momiyama

カワガラス (留鳥) (繁殖) (少なからず)

ツグミ大の黒褐色の鳥で周年渓流の上を真一文字に飛び、ピツ、ピツと強く鳴き、時として水の中にもぐつてゆくのをよく見かける特長のある鳥である。此の種は前之庄附近の川からこの山の山頂近い渓流迄見られる鳥である。昨年(25年)迄は非常に数多く居たが本年夏季県立公園候補地として宣伝せられ一般のハイカーが縦横無尽にこの山を公德心なくじゆうりんした為、1度に居なくなり唯々1.2羽見かけたのみである。因に、昨年8月迄は1日中此の山を歩き廻つても人間に出会う事は稀であつたが本年8月には放歌、詩吟全山に響き、新聞紙、チョコレートの紙は頂上からひるがえり、一寸繁みに足を入れれば足の踏み場なき大便の流出、正に有名な満洲国の新京大通りの野糞の偉観に優るものであつた。かくして雪彦山の偉大なる大自然美と神秘性は旬日にしてハクダツされてしまつた。

HIRUNDINIDÆ ツバメ科

(73) *Hirundo rustica gutturalis* Scop.

ツバメ (夏鳥) (繁殖)

(74) *Hirundo daurica japonica* (T. & S.)

コシアカツバメ (夏鳥) (繁殖) (少し)

此の種は腹が赤く且つ腰の所も赤褐色なので此の名がある。前種より少いが山麓ことに渡の際(秋)の数多く見受ける。

(75) *Delicton urbica dasypus* (Bonap.)

イワツバメ (旅鳥) (少し)

小さいツバメで腰と腹が真白いのでよく目立つ。特に春期の渡りの際よく見られる。ツバメより常に1週間以上早く渡来する。

CYPSELI 雨燕目

(76) *Apus pacificus* (Lath.)

アマツバメ (旅鳥) (稀)

ツバメとよくにているが縁が遠い。春秋の渡りの候に大空をカマの様な翼で円をえがいてかけめぐつている群をよく見られる。

CAPRIMULGI ヨタカ目

(77) *Caprimulgus indicus jotaka* (T. & S.)

ヨタカ (夏鳥) (蕃殖) (多し)

朝夕のうす暗がりにキヨキヨキヨキヨと物をきざむ様な声で鳴きフクロウの様に音もなく飛び交うハト大の鳥である。此の山では夏季至る所に見られる。

HALCYONES カワセミ目

(78) *Alcedo atthis bengalensis* Gmel.

カワセミ (留鳥) (蕃殖) (少し)

小形の水面低く弾丸の様に飛ぶ青い美しい鳥で一般にはアオズと呼ばれる。小学校附近の川面にみられ、あまり山の方では見られない。

(79) *Ceryle lugubris lugubris* (T.)

ヤマセミ (留鳥) (ごく稀)

ハト大の黒と白のまだら顔に冠りのある日本最大のカワセミである。この鳥は非常に少ない鳥で常に川面上つたり下つたりする鳥で、キツキツと鳴き飛んでいる時は殆んど白く見える。本種は尖栗郡奥谷附近では見られるが此の地に居るか否か筆者は久しく疑問に思っていた。大体本種は山が川にせまつていて且つ川はばが50m前後で、川の奥が高い山であると云う環境が必要の様で筆者が九州、中国、中部、北陸の暗地で観察したのも皆この様な条件の地であつた。ところが此処(雪彦山)では唯だ1つ、川はばがせますぎるのである。依つて長い間此の地には生棲せぬものと思つておつたところ、昭和25年8月18日遂に山之内小学校から約500m上流の人家附近の上を飛んでいる正しく本種の1羽を観察した。姫路市の昆虫研究家で鳥類にも知識の深い大沢哲彦氏も本年8月に筆者に「昨年8月中旬この種をこの山の中腹(ロープ線の起点附近)で1羽身近く観察した」と語られた。よつて稀乍ら本種は此の山の溪流へ飛来する事は確実である。本種は殆んど年中同じ溪流に生棲するのであるが筆者は本種の常棲地は小学校の横を流れている本流の上流地区である様思う。そして稀ながら時として此の山の溪流へ迷い込むものであろう。

PICI キツツキ目

(80) *Picus awokera awokera* T.

アカゲラ (留鳥) (蕃殖) (多し)

中形の体が青い美しいキツツキで此の山に於ては極めて多い。関東ではこの種は非常に少く、次の種アカゲラが多いのであるが関西では正反対である。常にカツカツと巨木を大音でつついて中のカミキリ虫の幼虫

を食するので非常に有益な鳥である。木に穴を明ける害など考えるに足りない。此の種がこの山に見られぬ様になつたら1年にして美しい樹相はカミキリその他の害虫の為に食害され枯死するであろう。本種はビョーツとか、キヤラキヤラと強い叫声を發する。此処の土地の人は俗名キヤラコと云うと教えてくれたが仲々良い俗名だと感じた。

(81) *Dryobates major hondoensis* Kuroda

アカゲラ (留鳥)? (蕃殖) (ごく稀)

本種は北海道に1亜種と本州に表記の1亜種があつて本亜種の分布は出雲地方が南限である。中部以北にはキツツキ類中の最も普通種であるが県下には個体数は少いアオゲラより少し小さい背面が白と黒の大きいしまと斑紋がある。筆者は西播地方で過去10数年間に野外で見たのは唯だの2羽である。昭和26年8月18日此の山頂附近で偶然1羽採集した。

(82) *Dryobates leuconotus kurodae* Gotz.

カンサイオオアカゲラ (留鳥) (蕃殖) (少なからず)

本種は北海道に1亜種、*D. l. subcirris* Stejneger エゾオオアカゲラを本州中部以北 *D. l. stejneri* Kuroda. オオアカゲラ、中部以南の大平洋沿岸及び四国に、*D. l. kurodae* Gotz. カンサイオオアカゲラを、四国南部九州に *D. l. namiyei* Stejneger. ナミエオオアカゲラの各亜種が分布する。

しかるに表記亜種の原因、大和地方に於てオオアカゲラに近い色彩の物とナミエオオアカゲラに近い色彩の物と両方見られるのでカンサイオオアカゲラなる亜種は独立亜種とせずに、色彩の濃い物をナミエゲラに、少し色彩の淡い個体をオオアカゲラにして此の亜種を認めない方がいいのではないかと云う学説がある。ところで雪彦山の物をどちらにすべきかはさておき(此処では独立亜種として記す。)此の山で筆者が2年間に採集した12個の各早標本を比較してみると、その内10ヶが胸の斑紋が太くてナミエオオアカゲラにやや近く、他の2個は斑紋が細くして少く、中部のオオアカゲラにやや近い色彩である。強いて云えば、ナミエオオアカゲラに近くオオアカゲラにやや遠いと云うところである。

さて本種はアカゲラによく似た背面白黒のまだら腹の赤い美しいキツツキであるが、少し大きくて胸から腹にかけて赤い地色の中に点々とし斑があるので区別出来、全国的にも稀な鳥である。縦未だ蕃殖に関する詳細な習性が学界には知られてない。ところが本種はこの山に個体数の多い事、或いは未だ他地方に比をみない。又此の種は留鳥性強いので此の山で蕃殖している事は確実であるが不幸にも筆者も巢は未だ確認出来なない。しかし大体5.6月の間である様に思える。筆者

は雪彦山を代表する鳥類で且つ貴重な種類は本種であると思う。

(83) *Dryobates kizuki shikokuensis* (Kuroda)

シコクコゲラ (留鳥) (蕃殖) (多し)

キツキ類中最小の種で此の亞種は本州の大和、伊勢、因幡、摂津に分布しそれ以北には *D. k. nippon* (Kuroda)、コゲラ、九州には *D. k. kizuki* (T.) キウシウコゲラなる亞種を産する。此の山の本亞種はキツキ類中最も多い。

CUCULI トケン科

(84) *Cuculus canorus telephonus* Heine

クワツコウ (旅鳥) (普通)

ホトトギス類中最も多い、この山では5月及び8月下旬9月に多く通過する。春季には鳴声が聞かれる。カツコウ、カツコウと高く鳴くのでカンコドリとも云われる。

(85) *Cuculus saturatus horsfieldi moore*

ツツドリ (旅鳥) (稀)

前種より遙か少い。ボンボンと鳴く。色彩はカツコウに似るが胸の斑紋が少し太い。

(86) *Cuculus Poliocephalus Poliocephalus* Lath.

ホトトギス (旅鳥) (多し)

有名な鳥で高く強くテツペンカケタカと鳴く。この山では春季の渡りの際にはカツコウより個体数は多い様に思われる。山中至る所で見聞き出来る。

前記3種のトケン科鳥類は色彩が皆よく似ていて声以外による判別はむづかしいが、次に区別点を記する。

①カツコウが最も大きく次にツツドリ、次に1番小さいのはホトトギス。

②ツツドリとカツコウは大きさが大体にているがツツドリは胸の斑紋が太く背面はカツコウより色が濃い。

③ホトトギスは1番小形で見違ふ事はない。

STRIGES フクロウ目

(87) *Otus bakkamoena semitorques* (T. & S.)

オオコノハズク (留鳥) (蕃殖) (少し)

最も普通のミミズクの1種である。大きさはハト大である。

(88) *Otus scopsjaponicus* (T. & S.)

コノハズク (旅鳥) (ごく稀)

有名な鳴声のアツボウソウである。渡りの際稀に通過するらしく筆者はこの山で9月に1回見た。前種によく似ているが遙か小さい。

(89) *Ninox scutulata scutulata* (Raff.)

アオバズク (夏鳥) (蕃殖) (多し)

夏に最も多い種類で朝夕森の中で高い声でホーツホーツと2声づつ連続に鳴く。青葉が繁る頃に渡来するのでアオバズクと云われる。

(90) *Strix uralensis momiyamae* Takatukasa

モミヤマフクロウ (留鳥) (蕃殖) (稀)

最も大きいフクロウで俗にボロキテホーコーと鳴くと云われる。本州北部に *S. u. hon-doensis* (Clark) フクロウ中部以西山陰に *S. u. momiyamae* Jakutakasa. モミヤマフクロウ中部以南太平洋岸にキウシウフクロウの各亞種が分布する。
鳥取県ではモミヤマフクロウを、神戸地方ではキウシウフクロウと記録されていて、筆者はこの山に於て目撃はしたが未だ採集出来ないから亞種名は断定出来ない。今後の調査が必要であるが今は一応標記の亞種として記載する。(神崎群のものはモミヤマフクロウであるから)

ACCIPITRES ワシタカ目

(91) *Falco tinnunculus interstinctus* Horsf.

チヨウゲンボウ (冬鳥) (少し)

小形のタカである。本年は10月上旬にアオバトを盛んに追う本種を観察した。

(92) *Buteo buteo burmanicus* Hume.

ノスリ (留鳥) (蕃殖) (少し)

トビ大であるが飛んでいる時には翼が太く且つトビより尾羽が短い。此の山には周年少数常に見られる。

(93) *Milvus migrans lineatus* (Gray)

トビ (留鳥) (蕃殖) (多し)

(94) *Butastur indicus* (Gmelin)

サシバ (夏鳥) (蕃殖) (多し)

ヒツ、クイーツと鳴き俗にキミタカと呼ばれる種類で夏鳥で数も多い。

GRESSORES コウロ目

(95) *Nycticorax nycticorax nycticorax* (L.)

ゴイサギ (留鳥) (少し)

山麓水田中に見る。

(96) *Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin)

ヨシゴイ (夏鳥) (少し)

非常に小形のサギで夏季水田中に少数見る。

COLUMBAE 鳩目

(97) *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

キシバト (留鳥) (蕃殖) (多し)

俗にヤマバトと呼ばれる最も普通種

(98) *Sphenurus sieboldii sieboldii* (T.)

アオバト (冬鳥) (多し)

青い美しい鳩でこの山に非常に多い。鳥声は尺八の様な、アアアアアアアアと妙な声である。前種に比

して非常に少い種類である、9月上旬から4月下旬迄この山に多数がみられ前種より多い。

LIMICOLAE シギ目

(99) *Scelopax rusticola rusticola* (L.)

ヤマシギ (冬鳥) (少し)

田シギ亞科中、最大の種で、本種は水田などには居らず主として乾燥した雑木林中に居り飛び方ものろい。麓から頂上迄至る所に見られるが数はあまり多い方ではない。俗にボアシギと呼ばれ味よく好適の獵鳥である。

GALLI 鶉鷄目

(100) *Phasianus versicolor Vieillot*

キジ (留鳥) (蕃殖) (少し)

本邦特有種で最近国鳥(国家を代表する鳥)に指定された。この山ではヤマドリより遙か少く冬期は特にもつと川下に渡り殆んどこの山の附近には見られない。

(101) *Syrnaticus soemmerringii intermedius* (Kuroda)

シコクヤマドリ (留鳥) (蕃殖) (多し)

本州のヤマドリの分布は、北緯35度10分以上に *S. s. scintillans* Gould ヤマドリ、それ以南の太平洋岸で *S. s. subrufus* (Kuroda) ウスアカヤマドリ、又本州中国地方と四国には表記、シコクヤマドリが分布する。特に鳥取附近のものは榎山徳太郎氏が、イナベヤマドリと亞種名をつけて発表した。(現在はこの亞種は認められていない。)この山では、ヤマドリとシコクヤマドリの間型の色彩が多い。

結 び

雪彦山には上述の如く 101 種及び亞種の種類を産する事が確実であり、なおこの外に今後調査すれば増加すると思われる。

さてこれを科毎に分けてみると次の様である。

カラス科	3	ムクドリ科	2
スズメ科	19	ヒバリ科	1
セキレイ科	5	メジロ科	1
キバシリ科	1	五十雀科	1
四十雀科	6	モズ科	2
レンジャク科	1	ヒヨドリ科	1
サンショウクイ科	1	ヒタキ科	7
ウグイス科	7	ツグミ科	11
イワヒバリ科	1	ミンサザイ科	2
ツバメ科	3	アマツバメ科	1
ヨタカ科	1	ヒスイ科	2
キツツキ科	4	トケン科	3

フクコウ科	4	ワシタカ科	4
サギ科	2	ハト科	2
シギ科	1	キジ科	2
計 101種及び亞種			

更に種類の渡りによつて留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥、漂鳥に分類すると(雪彦山を規準にして)

留鳥	31	夏鳥	10
冬鳥	28	旅鳥	26
漂鳥	6		

雪彦山の1年を通じて鳥類の種類と個体数の多いのは4.5月と9.10月である。この間には多くの旅鳥が珍らしい種類も交えて通過するからである。特に秋季には色々の樹木の果実を食する為に集合する鳥は1本の木の下で観察していてもいとまがない有様である。

植物の種類が多い事が如何に鳥類の種類と個体数に密接な関係があるか計り知れない。今後県立公園となるのであるから今なお巨木や多くの学術的に貴重な樹木が遠慮なく伐採されているが1日も早く止めて貰いたい。2.3年前迄、コケむす巨岩上の美しかつたアオネカツラは枯死し、ベニカヤラン、セキコクの無数に着生していた巨木は今もなく、この山の名実共に貴重なヒカゲツツジ、アカヤシオ、シヤクナゲの群落は無惨に切りはらわれ、昆虫の珍品も年と共に姿を消してゆく。

勝れた景観と動植物の宝庫、雪彦山を後世に守る事こそ兵庫県人の責務であり早務ではなからうか。

最期に、筆者が過去に観察し得なかつたもので此の山で可能性のある種及びつと以前に土地の人に知られていて種名の判別出来る(△印)種類は次の様である。

- (1)オオマシコ (2)キレンジャク △(3)トラツグミ (4)ハチジョウツグミ (5)ハリオアマツバメ △(6)アカシヨウビン (7)アリスイ (8)ジウイチ △(9)クマタカ △(10)フツボウソウ △(11)オオヌカ (12)ハイタカ (13)ミゾゴイ (14)アオシギ (15)エゾムシクイ (16)コムシクイ

(完) 1952年1月18日稿

(追記)

前記 101 種の記録に追加すべき種を最近観察したので、計 102 種となる。

ワシタカ科

(102) ツミ *Accipiter virgatus gularis* (T. & S.) (冬鳥) (稀)

日本産タカ類中の最小型の種で腹面に美しい横しまの多数ある種類である。